

平成 28 年度第 1 回神奈川県総合教育会議議事録

名 称：平成 28 年度第 1 回神奈川県総合教育会議
開 催 日 時：平成 28 年 6 月 21 日（火曜日） 午前 11 時 00 分から 12 時 00 分
開 催 場 所：県庁 新庁舎 5 階 第 5 会議室
出 席 者：黒岩祐治知事、桐谷次郎教育委員会教育長、高橋勝教育委員会委員、倉橋泰教育委員会委員、具志堅幸司教育委員会委員、河野真理子教育委員会委員、吉田勝明教育委員会委員

次回開催予定日：秋頃予定

問 合 せ 先：所属、担当者名 政策局政策部総合政策課政策調整グループ 星野
電話番号 (045)210-3056（直通）
ファックス番号 (045)210-8819

経過：

1 開会

平井政策部長：開会にあたりまして、本会議を主催します黒岩知事からごあいさつをお願いします。

黒岩知事：本日は大変お忙しい中わざわざお集まりいただき誠にありがとうございます。
今回は、平成 28 年 4 月 1 日付けで桐谷教育長が新制度の教育長になりまして、新教育委員会制度に移行してから、初めての総合教育会議となります。委員の皆様とはこれまで同様に、この総合教育会議を通じまして、十分に意思疎通を図りまして、本県の教育行政を推進してまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思っています。
さて、昨年度の総合教育会議では、皆様に様々なご意見をいただき、7 月に本県の教育、学術及び文化の振興についての方針となる「かながわ教育大綱」を策定したところであります。本日は、この「かながわ教育大綱」におけるこれまでの取組状況を振り返るとともに、これからの取組みの方向性について、皆様から忌憚のないご意見をお聞かせ願ひたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

2 議事

議題 1 かながわ教育大綱における取組状況について

平井政策部長：ここからの議事進行は、知事をお願いします。

黒岩知事：それではまず、「かながわ教育大綱における取組状況について」であります。本県の取組状況について事務局から説明させます。

○ 山崎政策調整担当課長より資料を説明。

黒岩知事：ただいまの「かながわ教育大綱における取組状況について」御意見がございましたら、お願いします。

吉田委員どうでしょうか。

吉田委員：特にとらわれず発言していいということなので、自由に発言させていただきます。

僕自身が思うに、地元の生活保護の会議に出席します。そうすると生活保護ってどういふ家庭なんだと聞くと、母子家庭が非常に多い。なんで母子家庭になったか聞くと多くの場合DV。多くの場合は、夫から妻への暴力があって、そしてその暴力の現場を見ながら子どもが育ちながら、そしてやがて母子家庭になって、そしていろいろな援助を受けながら中学校に入って、それから高校に行くという流れ。毎日毎日父親から母親が殴られたり、父親から子ども自身が殴られたりするような教育の下で学校に来て、「いじめはいけませんよ」という道徳教育は決して必ずしも意味があることではない。むしろ子ども自身よりも両親側の問題からやはり協力していかなければいけないという思いがあります。ですから金銭的な援助をして多くの場合中学校から高校までは行く家庭が多いです。でも、高校に行った子ども達は中途退学という形になっている。だからまだまだバックアップとして、高校に入った後、勉強だけではなく、その辺のところの協力というものをしてあげてほしいというようなことを常日頃から思っている。

例えば具体的には、スクールソーシャルワーカー、ケースワーカーなんかも大事なことなのですが、多くの場合若いのですよね。まだまだ若い人たちが一生懸命必死になってやってくるとなると、実際子育てをあまりしたこともない人が実際子どものカウンセリングにのっても、少しそこのところで、十分と感じられないことがしばしばあって、その辺からの相談として、精神科医として受けることも結構あるのですが、僕のイメージとしては、先生たちがいろいろな雑務に追われて大変なのだ。なかなか子ども達のそういう部分まで手が回らないのだというのであれば、定年になった校長先生であったり、副校長であったり、そういう思いのある勉強だけではなく子ども達の日常生活なんかをフォローしてそして守ってあげることで子ども達が退学しないですむ。勉強以外にそういったような明るい社会、倫理的なものを教育してあげれば、その子どもが高校をなんとか卒業できる。そうすることによってきちんとした仕事につける。そうすることによってさらに貧困の悪循環を断ち切る。そういった形につながるのではないかなという形で常に思っています。学校だけでいじめはいけないと言っても、そういう家庭の下の子供達に倫理的なことをやるにあたって限界があるので、もっと広い目でフォローする必要があるんじゃないかなというようなことを最近少し思っていることがあるので、発言させていただきました。

知事：定年した校長先生の活用なんかは、「地域の教育力向上」の中に入っているのですかね。

教育長：そうです。基本的には定年校長で、再任用で、教育委員会で雇用している方については、学校現場に行っていただいて、学校現場を支えていただく。総合教育センターなんか配置しています。あとは、再任用という形ではないのですが、いったん教育の現場を離れた方が、地域の県立高校でサポーターという制度を作っていますから、そこに来て、子ども達を見ていただく。そういったこともやっています。それを広げて

いくことが大切だと思います。

河野委員：まず、以前私が言いましたトイレのことを。学校訪問させていただいて現場を見ておきますと、知事のご配慮で、トイレが少しずつきれいになってきていまして、特に女生徒にはうれしいことだと思います。あとは老朽化・耐震への対応も少しずつ進んでいるのですが、まだまだかかると思うので、続けてよろしくお願ひしたいと思っています。

私は、自分の切り口から日頃感じていることと、今、ご説明いただいたこととリンクさせて二つくらい話ができばと思うのですが、一つは、私は、企業人の人材育成をさせていただいているので感じるのですが、人は社会に出てからが長いじゃないですか。ですので、まずはそちらからなのですが、図書館ですとか博物館ですとか、いろいろ社会教育施設がありますが、そこをもっとうまく活用して、また施設を新しく整備して、そこをいい拠点にすることはとても重要なことだと思います。設備ということと人ということと、ハードとソフトでうまく文化をつくって、マグネットにしていくということだと思うのですが、この辺も学校教育と同様に、力が入れられたらと考えます。

もう一つ、先ほどもご説明いただいた、グローバル人材のところなのですが、私は都内の仕事が多いので、よく東京と比べられます。東京都立国際高等学校が昨年国際バカロレア認定校をとっているのですが、本県でも横浜国際高等学校が国際バカロレア認定校に向かってがんばるのだと思うのですが、これは認定の施設もいると思いますし、特に人が、人はやはり人件費もかかりますが、あと先生たちの教育ですよ。とても大切なことだと思います。たとえば越境して神奈川県のある学校に来たいという人たちがいるようなマグネットの学校に出来たらと思うのです。過去において、外語短期大学付属高等学校だったときは、他県から引っ越して来て親戚の家に下宿して通っていた人もいました。なんか今回もそのような学校になったらいいな。そのためにまた少し投資も必要かもしれないのですが、グローバル人材の養成をお願いしたいというか、やっていきたいと思っています。

黒岩知事：国際バカロレアの認定校は。

桐谷教育長：基本的に施設の関係では別途整備をして国際バカロレア認定校の認定基準に合った施設を作ると。もう一つ人の方も基準がありますが、県立高校の教員の中でも、英語力の相当高い教員もいるのです。そういう教員が国際バカロレア認定校の研修を受けることによって国際バカロレア認定の要件になるそういった教員資格が得られると。ですから、最終的には、県立高校の教員の研修を生かして、国際バカロレア認定校で働けるようにするというのが一つと、そこで賄えなかった場合に人材をスカウトということも一定程度は考えていく必要があるだろうと、今その全体計画を練っているところです。現在のところは施設等についてこういう形で行けば一定程度取れるだろうと思っています。若干投資的な部分が出てきます。

黒岩知事：前段でおっしゃっていたのは図書館を新しく整備して拠点にするという

話でしたよね。

桐谷教育長：今この間、2年間ほど県立図書館、川崎図書館をどうやって行こうか、川崎図書館、それについて議論し、我々の方では基本的な考えをある程度とりまとめて、やはり県立図書館というのは広域的な県立図書館、それから市町村図書館にはない専門性を持った図書館、そういった位置付けがありますから、そこにプラスしてこれからの高齢社会なり、専門的な社会の中で、どう魅せる図書館、魅力のある図書館を作っていくか、そういったことについて、また教育委員会全体で議論していきたいと、また知事も議論させていただければと。今我々としては県立図書館の再整備というのが大きなテーマではあります。

黒岩知事：再整備の結果新たなそういう拠点になればね。

河野委員：人が集まるといいですよ。

倉橋委員：僕はすごくいい方向に行っているなと個人的には思っています。過去に持っていた価値観と世の中どんどん変わっていますから価値観を住民一人ひとり変えていかななくてはならないと思うのですよ。思い起こせば、僕が小さい頃は、戦後で高度経済成長期ですから誰でもいい学校に行ったら大企業に行ったらいいと。普通だったら農業をやっていたら収入がないときもありますけれど、サラリーマンをやっていたらなんでも給料を保証されるようなところでそこが一つの価値であって、そこで勝っていくことが重要だったのですが、近頃は少し違うので、そればかりやると勝ち組の生徒はすごく少なくて、逆に言えばですね、負け組をどんどん輩出してしまうのではないかという危機感を持っていたわけです。ですから、我々自身が勝ちということではなくて、スポーツで大成する人もいれば、板前さんとして大成する人もあるし、ベンチャーやる人もあるだろうと。多様な生き方ということに対して尊敬していかななくてはならないし、認めていかななくてはならないと思っています。そういうことで言うと、クリエイティブスクールを増やして、これ入学者選抜なしですよ。学び直し場を作ってやっ、言い方失礼かもしれませんが少し落ちこぼれかけている人たちをもう一回社会に戻していく大きな起爆剤になっているなあと思いますし、もっと言うと、定時制の問題もいろいろ言われていますけれど、夜間の定時制というのは昔の考えだと勤労学生がいて昼働かないとどうしても生活が成り立たない、そういう人たちにも学びの場を与えていこうということで、僕もそう思っていたのですが、いろいろ教育委員やらせていただいて、見ていると、そうではなくて、昼間で行けなかった人が行って、本当の勤労学生というものじゃないのじゃないかな。先生方も夜間の先生は夜の勤めになりますし、そういうことから言って昼間の定時制ができたこと、学び方も3年ではなく4年でやれるとか、そういう多様性ができてきて、いいのじゃないかなと僕は思っています。それと世界で活躍するような人を作ろうとする国際バカロレア認定校もあるし、授業力向上推進重点校ですか、今度6校できましたよね、そういった意味で生徒たちがいろいろな選択肢を持っていける方向に行っているの、僕は非常にいい方向に行ってい

るのじゃないかなと個人的には思っています。もう一つ言うと、もっと社会につながる
ことができないかなと。例えば学校で学んだことが社会で常識ではないということはよく
聞くことであって、高校じゃないですけど大学生を募集するときも我々がこんな人が
欲しいということと学んできたことと若干のずれがある。もう一つ高校におとしてみ
ると、誰でも大学に行かなくてはいかんという価値観を変えなくてはいけないのじゃ
ないかなと。もっと早く社会につながる人、大学に行かなくても、いわばドイツのマイ
スター制度みたいな、例えばパンの職人だけでもひとつランクがあって上に行くと尊
敬される。それで商売としても成り立つ。そういうところを一つずつでも作っていかな
くてはいけないのじゃないかなと、そっちの方が僕の持論なんですけど、少しずつでも
一校からでも作っていただけたらなあと思っています。結局大学だと自分の好きな研
究で単位がもらえます。高等教育だと、高校だと、これは県だとどうしようもないこ
となのかもしれないんですけど、画一的な単位ではなくてその世界における単位の
取り方があっていいのじゃないかな、例えば三重県の調理師さんの学校は就職率が
ほぼ 100%で皆生き生きとやっています。そういうところであつたら衛生学である
とか栄養学であるとかそういうものがその学校の特有の単位であつてもいいと思
うし、それで単位をもらえれば生徒さんは好きなことを一生懸命にやります。そ
れで自分でもお店を持ったら、経営学が必要だと思つたらそこからでも勉強でき
ますし、単にいつも画一的でいたら、言っちゃ悪いですけど、アルバイトだけ、フ
リーターみたいなものをいっぱい作っていたんじゃいけないのじゃないかな。それ
だけの収入じゃ子どももできないのじゃないかと僕は思いますし。社会に早く出
せる人も作っていかなければいけないのじゃないかなと個人的には思います。フ
ランスではよく言うのですけれど、税金を払ってくれる人を作るのだと。極端な
言い方ですけど。やはりそういう面も含めて、税金を払ってくれる、社会とつな
がっている人がいっぱいできればできるほど、県も国も豊かになってくるし、個
人も豊かになるのじゃないかな。我々自身が画一的にある価値観を変えていくこ
とが一番大事じゃないかなと。その指針を是非県の教育システムでやっていただ
きたいと。少し生意気言いましたけどそう思っています。

具志堅委員：私の立場から、子どもの体力向上について、少し思うところを話させて
いただきたいと思います。

体力向上キャラバン隊ということで、10 校の小学校に出向き、やり方、投げ方、その
方法、こうやればもっと記録が伸びるよというような、そんな指導を体力向上キ
ャラバン隊ということで派遣しました。私は今年も去年も行ったのですけども、去
年は 10 校、今年は 26 校に増えているのですけども、去年の数字を見ますと、全
国平均よりも行った学校の数字が上がっているという結果が出ているのですね。
ということはやり方を教えれば数字がすっと上がるということが証明されていま
すので。そういうことを広めていく研修会を開いてですね。そういうやり方、あ
るいは楽しさを教えていく先生たちを一人でも多く接していく必要があるの
ではないのかなと。線を 3 本引くと反復横飛びができますので、学校の休み時
間とかにでも、競い合つて、遊びの中で子どもが、自然に体力がついていく。
そんな仕組みがあればいいのかなと思うのですね。

お金もそんなに要りませんし、線引くだけです。何回出来たというのを、何かの

形で、朝礼で発表してあげたり、競争の原理で、この子は何回跳びましたよってというようなことを誉めてあげればまた変わってくると思いますし、その場のハイジャンプをしましても今この記録ですよと、子どもたちがわかればその記録を破ろうとするに違いなし、遊びの中で体力をつけていくということも、一方では、各学校で考えていく必要があるのかと思っております。

黒岩知事：本当にご協力いただき、ありがとうございました。「子どもの未病対策」ですね。

具志堅委員：行って楽しいです。一緒になって走ってやっていますので。

黒岩知事：結果が出るからうれしいですね。

具志堅委員：本当にそうですね。

高橋委員：図書館の改修の話に少し関連して、二つ申し上げたいのですが、一つは、教育全体をグローバルなものとローカルなものと、この二つ、両輪にしてほしいということです。

先程来、いろいろ、国際バカロレア認定校の設置などの話があって、神奈川も日本も国際社会になる。そこで、当然、英語を使ったり、いろいろな言語を使ったりするわけですけど、今、神奈川の高校改革のスローガンの一つとして、スチューデント・ファーストという言葉があります。生徒を第一に、前に押し出しますよ、ということです。これを前々から知事もいろいろな形で、生徒たちによる県議会とか、あるいは、いのちの授業の作文だとか、そうやってなるべく生徒たちが発表したものとか、意見を社会に反映させていく方向でいろいろと進められていて、全く同感でありまして、それが、私が考えるグローバル化の方向だと考えられます。決して、英語学習だけでない。生徒が持っているものを表へ吐き出す、社会へPRするという方向が一つあるかなと。そういう方向で今、動いてきていると思います。

もう一つは、住んでいる地元の街ですね。地方に行くと本当にいろいろ停滞したところが見られますけれども、私は、やはり教育は基本的に文化づくりで、それは、地域の人々がそこに暮らして、「ああ、自分は神奈川県にいてよかったな」というようなことを思うことが非常に大事なのではないかと思うのです。そこでやはり図書館とか文化施設とか県民センターとか、そういうものを充実させて、ある特別な人がそこに行っているいろいろな資料を調べるだけではなくて、仲間をつくる。65歳以上の人口が約27パーセントもいるという話ですので、僕らもそうですけど、結構、時間があるわけですよ。

図書館行って、新聞読んだり、雑誌読んだり、話をしたりする。資料を集めるだけ、資料を見るだけではなくて、そこで小さなコミュニティができる。つまり、話合える人ができる、もっと言うと、居場所ができるということですね。

文化施設を決して施設としてではなくて、人が集まったり、先ほどにぎわいという言葉がありましたけど、にぎわうような、そういうものを作ってほしいなと思っています。

それから、紅葉坂ですね。あのあたりは観光地ということもあって、よく人が集まる

ような場所を作ってくれたらいいと思っております。

もう一つはですね、優秀な教員の確保に関連するのですが、知事もご存知のように、OECDの調査では、日本の教員は非常に働き過ぎていて、1週間の労働時間がものすごく長すぎる。他は30数時間で、日本の教員だけ50数時間というデータもある。欧米の学校は一般に授業だけやればいいのですね。道徳は宗教がやり、特別活動は地域がやっていますから。日本の場合、みんな抱え込むわけですね。その上でさらに事務処理が多かったり、文書作ったりするというね。教員がやるべき仕事をなるべく限定してですね、これは事務職員、これはカウンセラー、これはスクールソーシャルワーカーというふうにですね、限定していつでも分業でお互い手をつないで学校を作っていくという、いわゆるチーム学校ですね、そういう形でもっと推進していきたいと考えています。知事にも是非ご協力をお願いしたいと思っています。

知事：神奈川県は、今年になってから、「人生100歳時代」という言い方をして、人生100歳時代の設計図を書こうという、もうすぐ私の本も出るのですが、「百歳時代－“未病”のすすめー」という本なのですが、いろいろと書きながら考えたのですがね、100歳というと、我々の今までの人生の中で、あまり想定してないというか、今までの仕組みってものが、若い時に教育を集中してやりますよね。それは当たり前、中学行って、高校行って、大学行く人は大学行って、それから社会に入って、というこの流れは当たり前前のことですが、60歳まで会社員、現役の生活。そして、60歳、後は老後、そういう設計図があったかと思うのですが、100歳となると、60でもあと40年間もあるわけですよ。この40年間もあるという状況から考えると、例えば、そこから初めて何か新しいことをやり始めても、40年の時間があるわけだから、なんか名人にだってなれるんじゃないかとかね。そういうことを踏まえながら、いろいろな新しい生き方をしている人もいます。先ほどの倉橋委員の話じゃないですけど、多様性ということですよ。

大学っていうのは、もう高校出てからすぐに行くものだと、当たり前ものになって、思い込んでいることだけでも、最近、学び直しっていうかね、萩本欽ちゃんの話が有名ですけど、70超えてから大学にもう1回行ってということの中で、70から大学行ったら、75、6で卒業しても、まだ単純に20数年ある。100歳ということであると。

そういうことから考えると、もっと学びの多様性。人生100歳時代にふさわしい教育のあり方っていうのは、実はもっとあるんじゃないかなと。我々は少し捉われすぎているんじゃないかなと。先ほどの倉橋委員の話を聞きながらそのようなことを考えたのですけどね。

河野委員：全く私も同感で、私はキャリアデザインが専門なので、その中でプロダクティブ・エイジング（生涯活躍/社会に貢献しつつ歳を重ねること）という言葉を使って人生のあり方を説明してるのですが、昔はキャリアデザインのイメージが80歳まででしたが、今は100歳まで描く時代に入っているのですね。先ほど言葉が足りなかったのですが、感じているのは、学校も大事なわけけれども、学校を出た後の長い人生を考えると、高橋委員もおっしゃっていましたが、もう少しみんなが集まる場があったり、その人たちが学び直せる場があったり、多様な学び方があるといいと思います。そのところに

もっと教育も目を向けるべきじゃないかなと思います。人はいくつになっても学ぶことは楽しいですから。

知事：多世代が混ざっていくということによって、本当なら定年退職、老後みたいな感じな人でも、技を持っている人が、若い子に教えることによって、その人も生きがいになって、この技術がこちらに伝承されていくっていう、そういう形は、もっともっと必要なんじゃないかと思うのですけどね。さっきの定年退職を迎えた校長先生の使い方も似たようなことがある。もっといっぱいあると思うのですよね。

今、県から被災地に任期付き派遣職員という形で行っていらっしゃる方、たくさんいらっしゃるのですが、神奈川県は、この数は全国で、ダントツでナンバーワンなのですが、神奈川県職員として1回採用して、そのまま被災3県に派遣しているのですが、これは主に専門職の人が多いのですよね。現地で専門職が必要だということで、復興のためには、まちづくりの専門家とか、電気の専門家とか、そういう専門家の人、こういう人材が、東京オリンピックの件もあり、すごく足りない。それを被災県は採用する余裕はないから、神奈川県独自で採用しているのですが、その時に年齢制限をなくしているのです。県庁職員として採用する時に、年齢制限をなくしていると、相当の年代の方も来てくださるのですよね。

この間、その方たち、ちょうど福島に行く機会があったので、福島に行っていらっしゃる方にみんな集まってもらって、話を聞いたのですが、すごく生きがいというか、やりがいを感じながらやったださっているということもありますね。

そういう人たちも、やはり場を求めてというか、今までの設計図の中では、高齢者になればなるほど生かす場がないと書かれている、なかなかそういう交流も行われないうか、そういう場をどうやって作っていくのか。

それから、さっきの文化施設、図書館なんかの拠点づくりの中で、いろいろな世代が混ざり合っていくという、そんなことも必要なとね。

高橋委員：知事がおっしゃるとおりです。今の知事のご発言を聞いて私が思うのは、成熟社会のモデルで社会を見ていられることに、私はすごく賛成なのです。どうしても私達が住んできたのは生産中心の社会、会社中心なのです。なので老後のこととかは現役中はほとんど考えていなくて、いわば仕事中心の人が多。国際的なデータで65歳以上の男性と女性にアンケートをとって、「あなたはいつも家以外にどこにいますか。」というと、欧米では「友達の家」とか「親族の家」、あるいは「スポーツセンター」とか沢山あるのです。けれども、日本の女性は結構友達が多いのですが、男性は「図書館」が圧倒的に一位ですね。その次は「公園」で、あとはほとんど行き場がないですね。やはり私たちの行く末が見えている感じがしますね。それはやはり社会自体が成熟していないからだと私は思います。そういう施設づくりに今まではアンテナを張ってこなかった。だからこれからはもっと社会全体が成熟してそういう人たちの出番を知事がおっしゃるように、学校でいろいろな授業をしたり、出前授業をしたりと、蛸壺から出られるようなはたらきかけを行政ができればありがたいと思っています。

黒岩知事：桐谷教育長、このかながわ教育大綱というのは、そういう中高年齢層の将来の教育という話は入れてはいけないものなの。

桐谷教育長：一番右の下の6番のところ。

高橋委員：「文化・芸術やスポーツ活動などと生涯学習社会における人づくりへの支援」と。

桐谷教育長：マグカルの下には、「社会教育施設における生涯学習の機会の充実」ということも入れておりますので、ですから、トータルで教育と捉えた場合に学校教育と社会教育と生涯にわたっての自分づくりという形での「かながわ教育大綱」、知事が定めていただいた中には、項目には入れさせていただいていると。ですから人生100歳時代のような新しい思想というのも当然議論ができると。

倉橋委員：最近読んだ論文によると定年という言葉をなくしたらもっと活性化する、各企業ね。定年するとなると考え方が変わってくる。そういう意味で発想の転換ですよ。従来のことに捉われずに自由にやってみることがすごく大事なんじゃないかな。僕らどうしても企業とすると、企業の活性化のために古い人にご遠慮願ったりとか、あまり言いたくはないのですが、歳がたって給料が年功序列で上がって行って、そのパフォーマンスが出ないからご遠慮願うとか、いろいろな考え方があるのですが、自分も63歳ですからもう定年になっているのですよね、実際。ラッキーなことに自分で作った会社だから働かせてもらっているのですが。そういう意味で考えてみると、「定年があるから」の発想ではなくて、なかったらどう考えるのだ、という考え方もすごくおもしろいのではないかなと。少し脱線してごめんなさい、これだけいろいろな技術が発達すると、予備校などそうですけど、人気のある先生のビデオを見るのですね、すごいところは1.4倍速でやるから。1時間で勉強するところを短縮して見られる。

黒岩知事：早回しで見るとですか。

倉橋委員：そうです。

知事：本当に。

倉橋委員：1.5倍速ぐらいだったらちゃんと聞き取れるのですよね。そういうところにモデル校で実験をして、先生方にはもっと人間的な関係を検討させるようなものを作ったらどうかと私は思ったのですが。それは来るべき世界についてどういう教員像を求めているかという、技術的に算数を教えるとか国語の読み方を教えるというのものもあるでしょうけど、僕はどちらかという、すごく上手い人を見せた方がひょっとしたらいいのかもしれないし、もっと一人ひとりの生徒さんとのフォローに先生方がまわるべきなのじゃないのかなと。そんなことを考えていると発想がすごく変わってくると思うのですね。いろいろな多様性を考えるとそういう学校も一つや二つ作ってテストしてみる

のも面白いかなあと。大事な生徒さんをモルモットのようにしてはいけないのですが、予備校は10年以上前からそれをやっているわけで。まあ、どうかなと。

吉田委員：知事が100歳時代という話をして、一番先に思い出すのは、埼玉県の上田知事と話す機会があって、彼が話す中でまず、サザエさんの磯野波平さんを出すんですね。はげ頭で真ん丸い頭で毛が一本だけ生えている。この人いくつに見えますか、という話から始めると、大抵全然知らない人は75歳や80歳と言います。実はサザエさんの設定では54歳なのです。その当時はこの人が54歳だと言って誰も不思議に思わなかった。そういう点から今はあの時代と20年、30年違うでしょ、20年、30年若返っているのですよ、という発想からすると100歳というのは当時の70歳くらいに相当する、そういう形でアクティビティをどんどんあげていかななくてはいけないし、私の病院にも高齢者の認知症の方がたくさんいますが、なにが一番ありがたいかという、期待されることに応えるというのが、一番彼らが喜ぶ。あれをきなさい、これをきなさい、ではなく何かをして喜んでもらえるというのが、非常に生き生きとするというような、役割を与えるというのが非常に気を遣う、という点に関していえば高校の定年になった人たちがまだまだそれこそ青春とはなんだ、の時代に正規教員になった人たちですからね、生徒の悪さ坊主たちを一生懸命教育した人たちが戻ってくると、そういう人を、言い方は悪いですが、倉橋委員的に考えれば、安いお金で使える形で効果が非常に上がるという点で、非常にありがたいと思うし。先ほどの図書館のこともね、一時期、鎌倉の図書館司書の人「学校にそんなに行くのがいやだったら図書館においで」というような話が話題になりましたよね。青少年の自殺予防というものに関して35歳くらいまでの死亡率で一番は自殺です。大人たちのその部分の自殺はいろいろな対策で右肩下がりになっているのですが、青少年たちの自殺はどんどん右肩上がりになっている。そういう部分をなんとかするためには、図書館の役割としてもそういったところに行って先ほどの先生みたいな人たちが「若い頃はおれだってこんな失敗したのだよ」、「こんなような悩みがあったのだよ」という世間話的なことをやる部屋が一つあってもある程度有効なのかな。そんなようなことを考えています。

黒岩知事：多様性という中で今思い出したのはハイスクール議会でね、提案があった中で、SNSの使い方ってところで先生は知らないだろう、俺たち教えてやるよって言って逆転、先生が生徒になったっていう、あれが受けた先生たちが、えらい喜んでた印象がありますけどね。ああいうのって結構面白いなと。だから、もっと大人が、若い高校生が教えちゃうみたいな、ていようなのがあるといろいろな多様性の芽が膨らんでくるかもしれない。そういうのをやると高校生たちも学んで、受身で学ぶだけじゃなくて自分が教える側に入って、すごく自信もつくだろうしね。

吉田委員：教えることは二度学ぶことですからね。

河野委員：生徒が主役になれるといいのですがね。イニシアチブが取れるという気持ちで。

高橋委員：私たちが進めようとしているアクティブラーニングも生徒が主人公で、場合によっては先生に教えたっていいのですよ。あることに関しては、非常に詳しく調べられますからね。先生が一方的に伝えて生徒が一方的に学ぶっていうのはもう終わっていると思いますね。いろいろな場面転換がいくらかでも起こりうる教育の場になってきているのですね。

黒岩知事：多様性というのは今日一つのキーワードでしたね。それをもっといろいろな、今まで我々が、どこか捉われていたものが、それを一回解き放って、どんな多様性があるか考えていかないと。今日の話の流れの中ではこれを一つ形にしたいなと思いましたね。

議題3 その他

黒岩知事：ありがとうございます。その他ということで。

桐谷教育長：今日、午前中この会議の前に教育委員会の6月定例会を開催しまして、今回の入学者選抜の採点誤りの再発防止策についてご議論いただきました。その関係で高橋委員からご発言をお願いしたいと思います。

高橋委員：今、教育長から説明がありましたように、この会議の前に教育委員会を開きました。今回の入学者選抜に関わる採点誤りにつきましても、知事にもいろいろご心配をおかけしております。このような事態に対して教育委員会として重く受け止めており、10年ぶりの教育委員会決議というものを行いました。また、これまでの教育委員会の中で再発防止に向けた協議を続けてまいりました。本日の教育委員会会議で再発防止と改善策を決定したところです。今後は入学者選抜の適正な実施に向けまして再発防止と改善策を着実に実行していきたいと考えております。また再発防止と改善策を実行していく際、知事のご支援をいただく場面もいろいろあるかと思いますが、ぜひともよろしくをお願いしたいと思います。

桐谷教育長：やはり議論になりましたのはマークシートとそれから知事がおっしゃっていた全受験生に答案用紙を返す。そこがいろいろと教育委員会の中でも議論になりました。今までお話していた方向で、これで改善策として取り組んで行くということでやってまいります。

黒岩知事：答案を返すというので僕はそれで全て終わるのかなと思ったのですが、それだけやれば。自分で見て「あ、これ違う」って自分が発見するだけで。それさえやればいいのかなど。それ以外にも様々なしかけを作って。でも、答案用紙全部返すというのも画期的なことなのでしょう。

桐谷教育長：これまでないですね。全国的に。

河野委員：心配はしていますけどね。

倉橋委員：事務的ミスが出ないかと。大変な物量だと思いますよ。

河野委員：ここ2人民間企業なので。

倉橋委員：どっちかというとそれで作業量とコストが先に浮かんでしまうものですから。

黒岩知事：あれはコピーして配るのですか。

桐谷教育長：答案用紙の写しですから。

黒岩知事：本物だと自分で書き換えちゃうかもしれない。コピー代はやはりかかるわけでしょう。

桐谷教育長：そうですね。

倉橋委員：書留で送らなければいけないし、なくなったら二次災害になっちゃいますしね。

桐谷教育長：基本的には手渡しができる状態のときに手渡しするという考えです。

黒岩知事：全員に配るのじゃなくて欲しいって言った人にだけ配るの。

教育長：全員に可否の決定通知を渡しますので、そのところに入れば基本的には全員に手渡しの段階で到達すると。

黒岩知事：それは「うちは届かない」という人が出てくるとまた困っちゃう。

教育長：郵送ですといろいろな問題も起きると思います。

黒岩知事：デジカメで撮ってネットで、自分で見られるように。

桐谷教育長：ネットもどこに飛ぶのかわからないということもありますし。

黒岩知事：改ざんするか。

河野委員：パスワードを入れたり。

桐谷教育長：詳細はまた、制度的につめていきたいと思っています。

黒岩知事：今日はありがとうございました。ほかに何かご意見がありましたら。

それでは事務局に返します。

平井政策部長：次回の会議でございますけれども秋頃を予定しています。具体的な日程・会場につきましては改めて調整をさせていただいてご連絡させていただきます。以上を持ちまして平成28年度第1回神奈川県総合教育会議を閉会いたします。長時間にわたりまして誠にありがとうございました。

会議資料

資料 かながわ教育大綱における取組状況について

(参考資料) かながわ教育大綱